タンカン‘名護紅早生'の育成とその特性

誌名	九州農業研究
ISSN	04511581
著者名	金城,秀安 長山,昭仁 宮城,光則 長嶺,安男 宮里,勉 赤嶺,民雄
発行元	九州農業試験研究機関協議会
巻/号	59号
掲載ページ	p. 188-188
発行年月	1997年5月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

タンカン‘名護紅早生’の育成とその特性

金城秀安・長山昭仁・宮城光則・長嶺安男・宮里　勉・赤嶺民雄
（沖縄県農業試験場名護支場）

Hideyasu KINJO, Syojin NAGAYAMA, Mitunori MIYAGI, Yasuo NAGAMINE, Tutomu MIYAZATO and Tamio AKAMINE：On the Breeding Process and the Characteristics of New Tankan Cultivar ‘Nagobeniwase’

タンカンは中国の広東省が原産地で，スイートオレンジとポンカンあるいは他のミカン類との雑種（タンゴール類）であろうと考えられている。

わが国へは1896年（明治29年），鹿児島県に導入されたが，栽培に移されたのは1929年（昭和4年）以降であった。

沖縄県においては農業試験場で1925年（大正14年），‘年柑’の名称で導入試作が行われた。民間への導入は昭和の初期であったが，本格的に栽培が行われたのは1965年代頃からであった。

この動向に対応して，沖縄農試名護支場では1971年からタンカンの育種を実施してきた結果，1993年7月に着色が良好で，しかも早生で食味に優れた‘名護紅早生’を育成し，公表した。ここに育成の経過と特性の概要を報告する。

1. 育成経過

この品種は1971年に沖縄県農業試験場名護支場（名護市在）において，台湾より輸入されたタンカンの果実から採種し，翌年播種，1977年初結実した。1978年14個体，1982年1個体選抜した。その中の1個体が当該品種で，特性の調査，確認を行って育成を完了した。

そこで種苗法に基づく品種登録の出願を1991年3月に行い，およそ2年後の1993年7月には品種登録されるに至った。

2. 特性の概要

この品種の果形は円で中果，果皮色が紅橙色である。育成地（沖縄県名護市）において1月上旬から収穫できるタンカンである。

樹姿は中間，樹の大きさおよび樹勢は中である。枝梢の太さは細，節間長は中，枝梢のとげは少ない。葉身の形は披針，先端の形は漸鋭尖，基部の形は純，葉身の大きさは小，葉形指数は大，翼葉の有無は無，葉柄の長さは中，太さは中である。

果実の外観は円，果頂部の形は平坦，凹部の深さは浅，凹部の大きさは小，花柱痕の大きさは小，果梗部の形はやや凹，果梗部放射条溝果の多少は少，中心柱の大きさは中である。果実の大きさは中，果皮の色は紅橙，油胞の大きさは中，密度はやや多，果面の平滑度は中，油胞の凹凸はやや凸である。果皮の厚さは厚，剥皮の難易，じょうのう膜の硬さは中，砂じょうの色は橙である。果汁の多少は多，甘味は中（ブリックス11度程度），酸味は少，香気の多少は中，種子数は少である。開花期は早，成熟期は早で，育成地において1月中旬である。単為結果性は高，生理落果の多少は中，日焼け果および裂果の発生はかなり少ない。

‘垂水1号’と比較して，果皮の色が紅橙で濃いこと，じょうのう膜が硬いこと等で，また，‘T132’と比較して，果皮の色が紅橙で濃いこと，果面の平滑度が滑であること，甘味が多いこと等で区別性が認められる。

3. 成果の利活用および留意点

CTLVフリーのため，カラタチ台およびカラタチ台ウンシュウ中間台に接木が可能である。

屋根かけなど，施設を利用した栽培体系で正月向けの早期出荷および完熟果生産に適した品種である。

早熟性のため1月中に収穫を終了した方が良い。

第1表　タンカン‘名護紅早生’の果実特性

供試品種	1果平均重（g）	果形指数	果皮厚（mm）	果皮色a値	種子数	果肉歩合（%）	果汁歩合（%）	Bx（%）	クエン酸（%）	糖酸比
名護紅早生	224a	120	3.6	27.0a	3.5	73.4	77.6	11.2	0.52	21.54a
垂水1号	188ab	118	2.8	13.6b	3.3	79.1	74.9	10.9	0.66	16.52b
T132	165b	118	3.1	16.3ab	3.0	75.2	75.0	9.9	0.64	15.47b

注）a）昭和52，53，54，55，60，61，62，63年度，12月中～下旬，1月中～下旬の2回分析の平均値
b）Kruskal-Wallis検定による多重比較，異符号間に$p<0.05$水準で有意差あり